

子どもの遊びを理解するために

子どもの発達における遊びの機能・積木遊び

Understanding Children's Play

R. E. Hartley, L. K. Frank, R. M. Goldenson.

Columbia University Press. N. Y. 1952

この本は、序文にも書かれているように子どもの遊びを、精神の健康という面から主として取り扱っている。つまり、子どもは、遊びを通して、自分自身を知り、自分の道を見出すのであるが、その際の情緒的

な要求や生活への適応を理解し、助力するために、親も教師も、十分に遊びを理解することが、子どもの精神衛生上、大切だということになる。この本にまとめられた研究は、その理解のために役立つ。これは、一九四七年より二年間、著者たちが中心になって、心理相談員、保育園やチャイルド・センターの先生、指導者などが協力しておこなわれたもので、二歳から六歳までの子ども百八十人を、九十八人の観察者が観察した。これら観察者は、児童心理、心理療法などを学ぶコースを終えた人、保育園などでの教育の経験がある人が、観察の一定の型や方法を教えられ、逸話記録をとった。この研究では、子どもの心を理解しながら、遊びの材料(玩具、ゲーム、創造的な活動)もたらず教材など)と表現活動を、広く自由に、適切に用いることを探求している。このため、多くの玩具製造業者も、望ましい遊びの材料を作るために協力している。第一章は、子どもの発達における遊びの機能という題で、二章以下は、それぞれの遊びについて書かれている。

×

×

子どもの発達における遊びの機能
The Function of Play in The Child's
Development

ここでは主として、遊びが子どもの精神発達のなかで果たす役割について、いろいろな研究者の考えをあげながら述べている。けれども、一貫して流れているものは、創造的活動や自由表現をおこなう場として、遊びを重要なものと考えることである。

Kubieは言っている。子どもの持つ、混乱した幻想、恐怖、誤った解釈・概念、思慕や闘争、誇張された恐れや罪などを表現する機会を持たせ、これを適切に処理して、これらから解放することが、成長の過程に必要なことなのである。では、どんな方法でおこなったらよいだろうか。Kubieは、デイスカッション・グループを考えている。ここでは、孤立しては表せない内面的な感情を出すことが、助けられるかも知れない。しかし、小さい子どもは、ことばという象徴を通して、情緒的な経験を表現することが、むずかしい場合も多い。Lowenfeldは、子どもの経験は、舌のまわらない、複雑なものであり、おとなの概念、先入観、重要さ、禁制には当てはまら

ないものだとも言っている。そこで、子どもがなにを経験しているかということを利用して、解するために、臭、味、触れてみるなど、子どもの「接近の感覚」を、見たり、聞いたりする「距離のある感覚」と同じに、充分用いることを許し、その活動を観察する。これはまた、子どもが、充分に体を用いる表現の方法でもあるわけで、子どもの体は、感覚と表現の組織であると言える。この子どもの主観的な感覚とおとなの社会的なコミュニケーションのためのことばや行為との中間に遊びがあるというのである。Erikson は、失敗、苦痛、欲求不満など、とくにことばを使うことに限界があるとき、遊びは、これを補うために用いられると言っている。そしてまた、遊びは、子どものことばのないコミュニケーションでもあるというのである。

Slavson も、遊びによって、子どもが、ほんとうの闘争心や困難を代えるとか、緊張や心配を緩めるなど、その出口を見出すと言っている。そして、さらに、治療的遊戯グループを論じて、グループ遊びの価値を見出している。すなわち、なんらかの子どもが一しょに遊んでいる時、彼らの相互

作用と、お互いの間の支持は、材料を進んで用いることを助けるといように、グループの中では、ひとりの時よりも、表現活動が拡がり、高まるということである。

学校でも治療的な技術が用いられる。Gillies は、劇化を子どもの情緒の再教育で用いて効果のあったことを、報告している。つまり、グループの中の緊張を、ドラマ化することによって、やわらげ、変えることが可能であるということである。余りに攻撃的な子どもも、他の子どもと柔軟性を持って仕事ができるようになり、抑圧された、引込み思案の子どもは、だんだんに、自分の考えを自発的に出し、発言するようになってきたということである。そして、子どもの間に、ほんとうの歩み寄りがあったということである。また、家で話すことを止められている話題とか、家庭の事情などというものも解り、子どもを理解し、方向づける出発点にもなったということである。あやつり人形も Gillies 女史が言う劇遊びと同じような効果がある。しかも、音楽リズムなどの他の活動も、緊張を解き、初歩的な子ども同志の歩み寄りを作ることができるということである。

また、特別なグループを作って、その中で子どもを治療することも考えられている。たとえば、ニューヨークの或る公立学校では、不幸な家庭の子ども、英語を話さない家庭の子ども、引込み思案の子どもなど、小さいグループで、暖く、寛大に取り扱うことが必要な問題児のために、五人位の小さいグループを作っている。そこでは、自由遊びがうまくおこなわれるように、玩具、本、積木、プラスチックの材料が用意され、特別の遊戯室で、一時間遊ぶために、一週三回、普通の教室から子どもが連れて来られる。また、他の学校では、怠慢であったり、攻撃的であったり、引込み思案であったりする子どもたちが、十人以下のグループに入れられ、芸術、手の仕事、音楽、あやつり人形などを治療の手段として用いている。これらの結果は、普通の学校の中に、特別な子どもたちのための遊びのグループが作られることの必要を語っている。つまり、これらの遊びのグループが、どんなに、子どもの情緒的発達に大きな役割を果しているかということである。また、即興的な物語をすることも、子どもたちの興味を捕え、子どもたちの感

情を自由に表現するための道を開くことである。Tipton は言っている。物語も、まえにあげたものと同様に、情緒的安定をもたらし、表現活動を自由にする大切なものだというのである。

結論は、おとなは子どもの考え、感情、要求、目的、闘争や苦しみ、危惧や不安、幻想や正直さなどを理解し、見出し、それを排除するのではなく、むしろ、充分にそれに向い、その中で困難を生き抜くことを可能にするように考えなければならぬということなのである。そして、このことが、子どもの遊びを通しておこなわれるところに、遊びの機能があるのである。

(お茶の水女子大学・北野誠子)

積木遊び “In the block corner”

積木は就学前の子どもたちに最も広く使用されているものであろう。どんな幼稚園でも、積木遊びの機会は与えられ、子どもたちは強い興味を持ってそれを使っている事により、積木の重要性は明らかである。

アルシューラー Aischuler とハットウィック Hattwick は、空想的思考から現実的に移行しつつある年少児にとっては、

積木遊びへの興味は、子どもたちの周囲の世界の事実を発見することにもなり、それは重要であると主張している。また積木使用に慣れている子は、それを種々な方法で自由に使うが、適応出来ない子は、同じ物を何度もくり返して作り、合同・連合遊びなどせずに、ひとり遊びの為に積木を使うことが多く、自分の作品に対しては強い反応を示す。積木遊びは、描画より著しい自己表現の機会があるから、子どもの内部を理解するには良い方法であると述べている。

積木について他の心理学者の説は次のようである。子どもは希望や幻想を表現する際に、直接ことばでするよりも、手近な材料を使って、遊びの中のことばで無意識的に、しかも矛盾せずに心の中を表現する。積木を使って自分の周囲に、統制出来る範囲の、おもちゃの世界を構成し、身体的・知的・社会的経験を具体化する雑音や混乱状態は、健康な子が過剰なエネルギーを発散する為に絶対的に必要である。もっと激烈なエネルギー発散としては、おとなの生活においても危険と闘う能力が要求されるように、子どもも危険の要素を持つ遊びを作り出している。

この研究では、実際に積木を使用している子どもたちを観察し、それをもとにして積木の役割を考察し、教師のなすべき事へと発展させている。

(一) 調査方法

自発的に積木遊びをした二十七の幼稚園のグループの九十七人の就学前(年令二才半～五才半)の正常児で、積木遊びに慣れている子から、非常に問題をもつ子まで、すべての種類の子どもを対象とした。

積木置場の状態や使用法は、標準化しようとして、普通の状態のままとした。したがって部屋が狭く特定の日しか積木遊びの出来ないような幼稚園から、広い遊戯室の一角を積木の為にあててあり、いくつかの柵から自由に取り出して遊べる所まで設備はさまざまであった。部屋の状態により教師の態度は異なった。例えばクラス全部と一緒に遊べずに、割り当てられた時間に数人ずつ遊ぶ場合には、時間の終りには全部かたづけの事を要求したし、部屋に制限のない場合には、教師は自由に使用させた。

この研究は、統計的な研究ではないから、数字で結果を出すよりも、内容的にどんな要素に気づき、どのように使うか、お

となが予期している事と反対の事に使ったりした時、何を子どもは要求してそうしたかなどを考察した。

(二) 積木の役割

一、遊びに近づく手段としての積木
他人と一しょに遊べない子・臆病な子・消極的な子・創造力に欠ける子など、遊びに参加するのが難しい子にとって、積木は遊びに引き込む手段である。その理由として次のような事が考えられる。扱い方が簡単。・描画に比較しはじめての子にも恐れを感じさせない。・頭丈であるから安心して使える。・共同遊び・平行遊び・ひとり遊びと、自由な方法で、気楽に遊べる。・自分の環境を表現出来る。・創造する事の満足感を得られる。・他の遊具と関連を持たせて発展出来る。

二、積木を媒介としての統制感
ある物を完成させたり、制御したりした時の感じは、圧迫されている力や制限からの逃げ道ともなる。

飛行場や摩天楼などを作った時、その模型を作っただけでなく、心の中では実物を小さくしたものを自分の支配下におき満足感を味わっているのである。男子は機械

力に関係のある飛行機・トラック・自動車などにおいて、統制感・満足感を味わう。

三、束縛からの解放の為の積木

圧迫が強くなりすぎても、それを発散させる方法がない時には爆発に導びく。この安全弁としての役割を積木は持っている。成長しつつある子どもが、必要と感ずる時にエネルギーを発散させることは有益である。安全弁としての役目を、両親や教師に

制限されると、子どもは葛藤状態を示す。実際に積木を使って過剰なエネルギーを発散させる方法としては、箱の中に大きな音をさせつつ入れ、音の出るのを楽しんだり、積み重ねては倒す事に喜びを感じたり、積木を投げあつたりすることである。

これらは、はじめは偶然に経験するが、次第に面白味を感じて、破壊するのを目的で作ったり、倒すことに完成感と同様のものを感じる場合もある。子どもが雑音を出すこと・破壊する事・投げる事など爆発的行為が自由に出来れば、精神衛生の面で役に立つであろう。

四、怒りの表現の代用物としての積木

積木は子どもたちが怒りをもらそうとする人に対する敵意表現の代用物としての役

目を持つ。怪我などの害を防ぎ怒りを発散出来る。この目的の為に他に適当な方法があれば、それを用いて解決すべきである。臆病な子は積木を床に叩きつけたり、積木の建物を壊したり、大きな音をたてて投げたりして、直接相手には怒りを表現しない場合が多い。

五、安全な冒険の機会を与える積木

子どもの周囲には常に種々の危険があり子どもを誘惑しているから、危険な状態に自分をひき入れることがしばしばある。例えば、積木を重ねた上に乗ったり飛び下りたり、橋や階段など恐怖を与える状態を作ったり、そこを歩いたりする。これらの事は、恐怖症でいつもおびえている子に役立つ。

六、居心地の良い積木のコーナー

主として自分の生活に憤り・恐れを感じる子や友だちと親しみにくい子などが、集団意識の芽生える前段階で、グループから孤立し、逃れるチャンスを求めることがある。その時積木のコーナーは彼らの要求に適した場所である。保護された安全な場としてここに逃げこむ。例えば、積木の空箱に入ったり、区切りのカーテン・柵の背後にかくれたり、積木で家を作りその中に入

ったり、ベットを作つて寝たりする。

七、象徴や幻想を表現する積木

いわゆる積木遊びであり、自分の周囲の物・夢の世界などを創造的に表現する。積木遊びをしつづ話している事を聴き、している事を観察し、子どもの表現した物を理解することは、環境や子どもの持つ問題を知る上に便利である。実際に作っている物が役立つか否かは別問題として、積木を用いての劇は、子どものパーソナリティ完成に大きな役割を果たす。

八、グループを助ける積木

家庭的に恵まれず、問題行動をする子どもの療法として積木を用いてグループに親しませるとよい。積木は家庭でも幼稚園でも出来て親しみやすく、友だちとも、ひとりでも全く自由に遊べるから、グループ体型へと発展するいとぐちになる。

(三) 教師はどうすべきか

◎場所と材料について

自由な積木遊びには広い場所が必要となる。場所を十分に使えない場合、室内用のを室外で用いるのも一方法である。また移動出来るカーテンや柵で区別すると良い。

積木の置き場は一か所より数か所に分け

た方が何種類かの遊びが同時に出来てよい。消極的で自由に遊べない子には、教師は活動を制限しない程度でそつと近寄つて指導すべきである。積木で物を作つて遊ぶ過程を楽しむと同様に、出来上つたものに興味を持つ子がいるから、いくつかの物は作つたまま置いておき劇などに使うとよい。

完成したものを壊し作り直す事は、教師が援助せず子どもたちにさせて、この機会を利用して子どもの行動を指導する。手におえない子には積木遊びの機会を十分に与えることが必要であり、自主性のない子には創造的遊びへと誘導すべきである。

◎指導法

消極的な子がグループの近くに居る時には、その子が興味を持ちそうな事をして見せたり、導入出来るような材料を持って来たり、積極的な子と同じグループに入れたり工夫する。

子どもたちが遊びに慣れるまでは、いろいろの方法で援助を与えるが、彼らが興味をいだきはじめたら、なるべく教師は離れて子どもだけで発展するようにする。

子どもの攻撃的行動は、禁止するよりもなるべく自由に出来るように考慮する。例

えば、子どもたちが積木を投げたがっているような時、また投げている時、禁止せず、怪我せずに投げられる場を作つてやるべきである。教師がいなくては危険だと思つた時には、教師のいる時だけ投げてもよいという制限を与えればよい。

積木遊びを一定の型にはめてしまうことは危険である。子どもの希望通りに自由に発展さすべきである。したがって教師は子どもの行動を観察する際には、少し離れた所からすべきである。

積木について教師の為に書かれた古い書物の中で、積木使用の際の制限は、積木を投げてはいけない、作成した物を壊してはいけないということである。と述べている。これが述べているような事は、子どもの遊びに関しておとなの標準で考えたものを強いているのである。現在では積木使用に関する考え方も著しく異なり、単に操作力・創造力などの技術向上のみでなく、広範囲の目的を持つ。したがって教師は、積木遊びの時には、子どもの会話・行動・友だちとの関係などを、注意深く観察し理解すべきである。

(茨城・下妻少友幼稚園 福西百合)